

タヒチー — パラダイス

ヨーロッパによる表象

鷺巣 由美子

1. ヨーロッパによる「発見」

大航海時代以来、ヨーロッパの列強は、地球上の新たな土地を「発見」し、それに関する知識を拡大し、また経済的に利用し、果ては植民地化していった。だが航海を実際に行った者たち、特に同行した学者たちの関心は、むしろ地理学・博物学上の知識の拡大、また、人間に関する知識の拡大に向けられていた。このように多様な利害関心が作用する中で、ヨーロッパ人は南洋諸島を「発見」する。それは折からヨーロッパにおいて啓蒙が展開した時代である。18世紀の啓蒙ヨーロッパは、新たな土地を発見するにとどまらず、それを記述し、新たな土地に関する知識を広めようとする。こうして世紀後半には多くの旅行記が出版された。そして旅行記は博物学・地理学に影響を与え、また人類学の端緒をひらいただけでなく、文学的空想力をも刺激し、多くの虚構の旅行記が成立することとなる。

中でも南洋の島々、特にタヒチは、ブーガンヴィルやクックが寄港し、彼ら自身や同行者が航海記を発表して以来、啓蒙期のヨーロッパにとって特異な存在となっていった。複数の旅行家の旅行記が発表され、それを下敷きにして、タヒチを舞台ないしテーマとする虚構の文学テクストが相次いで書かれた。例えば、クニッゲという啓蒙の貴族作家が18世紀終わりに書いた虚構の旅行記でも、タヒチは地上の楽園として描かれている。この

作品は、ゲオルク・フォルスターの旅行記が出版された後に書かれたものであるが、現実の旅行記を下敷きにして同時に、その伝えるタヒチ像を部分的に誇張したり変更したりもしている。タヒチをめぐる言説を比較すると、このように、特定の記述が踏襲、反復されていることが明らかになる。その一方で、その定式に加えられた部分的変更や新たな意味合いも、浮かび上がってくる。本稿では、幾つかの現実の旅行記と虚構の文学作品を検討して、こうした言説の成立と変遷の過程を辿ってみたい。

同時にこの考察は、タヒチを描くテキストの比較、検討から浮き彫りになってくる問題、タヒチをめぐる言説を作り上げていった啓蒙ヨーロッパの意識という問題を、つねに射程に入れている。今日から見ると、18世紀の旅行記や文学テキストに記されているのは、未知の珍しい土地についての新たな知識だけではない。これらのテキストはタヒチと同様に、いやそれ以上に、タヒチを観察し記述する啓蒙ヨーロッパを語っている。従って、タヒチをめぐる言説を検討することにより、言説の主体たるヨーロッパを逆に照射していくことが、本稿の最終的に目指すところである。

以下においては、タヒチを描いた代表的な旅行記、すなわちブーガンヴィルとフォルスターの旅行記を取り上げ、次いでこれらを下敷きにして啓蒙の作家、デイドロとクニッゲが書いた虚構のテキストを検討し、考察を進めていきたい。

2. 旅行記

18世紀ヨーロッパでは、宗教・歴史・思想上の啓蒙が進む一方で、絶対主義のもとでの政治的腐敗、多くの貧民、支配階級の墮落という現実を直面し、多くの知識人がこの矛盾からの出口を探し求めていた。ルソーは『人間不平等起源論』において、こうした諸悪の根元を人間社会にあると

し、人間が社会化する以前の原初の状態、人間が真に自由で社会的に不平等のない状態を歴史を遡って「憶説的で条件的」¹⁾に再構成しようとした。したがって彼の自然人 *homme naturell* は、理論上の抽象概念であるのだが、これが15世紀末の新大陸発見以来ヨーロッパを席卷していた「善良な未開人」 *bonne Savage* という像にすりかえられ、この世に未開の自然状態で幸福に暮らす民がいるという願望が醸成されていった²⁾。

大航海時代以降ヨーロッパが実際に新たな土地を「発見」し海洋地理学上の知識が増すにつれ、この地上に、エルドラドであれプリースター・ジョンの国であれ、パラダイスがあるという中世までの世界像は影を潜めていった。だがその一方で、それまで伝説的に伝えられてきた南半球にある豊かな大陸の発見をめぐる議論が、地理学および哲学の領野で真剣に行われるようになった。地理学上、また植民地政策上、その発見が緊急の課題となったのである。ブーガンヴィルやクックも、この伝説の「南の大陸」を発見することを目的のひとつとして航海に出たのであった。ところがブーガンヴィルとクックが相次いで世界周航を行い、その旅行記が発表されたことで、「南の大陸」の地理的伝説は決定的に覆された。また彼らは従来の伝説に囚われることなく経験的な記述を目指したため、未知の土地の人間についてヨーロッパの想像力が描き出した怪物じみた像は修正、削除されていった。だが他方で、彼らによる南洋、なかんずくタヒチの記述は、ヨーロッパに以前からあった神話に新たな現実性を与え再生するこ

1) ジャン=ジャック・ルソー（本田喜代治・平岡昇訳）：人間不平等起源論（岩波文庫）1992年第65刷38頁。

2) ルソー自身が *homme naturell* の特性と生活を推測的に語る際に、実際のアメリカの未開人、カリブの住民、ホットtentなどなどを例として挙げていることも、「善良な未開人」というイメージに対応する（とヨーロッパによって考えられた）表象の形成に貢献している。「善良な未開人」というイメージ形成の過程において、ルソーの自然状態についての叙述が18世紀後半のヨーロッパの思想において果たした役割については、以下の文献を参照した。Kohl, Karl-Heinz: *Entzauberter Blick. Das Bild vom Guten Wilden.* Frankfurt/M (Suhrkamp) 1986, S.173-200. ルソーにいたるまでの文学に表れた「高貴な未開人」モチーフに関しては、Bersier, Gabrielle: *Wunschbild und Wirklichkeit. Deutsche Utopien im 18. Jahrhundert.* Heidelberg (Carl Winter Universitätsverlag) 1981, S.130-137.

とに貢献した。「善良な未開人」の神話である。

2.1. プーガンヴィル

1766年～69年の世界一周の後、プーガンヴィルの『世界周航記』は1771年に出版された³⁾。これをもってヨーロッパは初めて南洋の地理、人間、動植物に関する包括的な記述に接することができた。彼は序説において、周航記を「興味本位の読みもの」としてではなく、まずは「船乗りのために」書いたのであり(20頁)、自分自身が観察したところを記述するよう心がけたと述べている。確かに彼は立ち寄った土地で目にし耳にしたさまざまな異なる人間、社会、風俗を、忠実に書き記そうとする。特に、彼がアメリカ大陸南端で遭遇したベシュレ人は、「善良で幸福な未開人」という像を批判的に見直す契機となる。彼らは「自由で自律した、負債も資産もない、それより上のことを知らぬがゆえに自らが持つものに満足している人間」でありながら、「生活を快適にするものを欠いている上に、なお、世界でもっとも過酷な気候の厳しさに苦しまねばならぬ」(159頁)だけでなく、彼らの間には文明化の過程で生じる「悪徳の萌芽」も見出される。「自然状態と呼びうるものの中にいる」ベシュレ人の悲惨な状態を目にしたことにより、彼はルソーの観念的な説を批判する。

こうした客観的記述を要請する態度の一方で、タヒチの描写には、ヨーロッパの知覚・描写のレパトリーによって規定されたイメージが忍び込んでいる。タヒチの美しい女たちは「あたかもフリギアの羊飼いたちに現れたウェヌス」(193頁)のようだと形容され、また、プーガンヴィル一行のために、タヒチの「顔かたちの美しい島人」が笛の音に合わせて木陰で歌を歌ってくれるさまは、「心和む情景で、プーシェの筆にふさわしいも

3) ルイ=アントワーヌ・プーガンヴィル(山本淳一訳)：世界周航記(岩波書店)1990年。以下引用に際しては本文中に頁数のみを記す。

のであった」（197頁）。タヒチの情景と人物は、ヨーロッパ絵画のモチーフと構図に還元されている。タヒチの風景と人間の独自性は捨象され、ギリシア神話風の情景へと美化されているのである。

タヒチは西洋的な美の枠組みに当てはめられているだけではない。「私は、これほど姿かたちの美しい、これほど均整のとれた男たちにかつて出会ったことがない。ヘラクレスやマルスを描くのに、これほど見事なモデルは、どこにも見つかるまい。彼らの顔立ちはヨーロッパ人と少しも違くない。そして、もし彼らが衣服を身につけ、これほど外気や太陽にさらされることなく暮らしたならば、彼らは我々と同じくらい白いであろう」（216頁）。タヒチの美をはかる尺度としてギリシア神話の形象が挙げられ、西洋の美の規範が用いられているばかりでなく、タヒチ島民の形姿が、その肌の色を除けばヨーロッパ人と同じであると述べてられており、タヒチ島民とヨーロッパ人とに共通の祖先を措定したいという秘かな願望が伺われる。

人物や風景の美しさばかりでなく、タヒチ人の素朴さ、廉直、彼らの間の平等もブーガンヴィルの心を引く。島の奥を歩き回った際に彼が目にしたのは「多人数からなる民族が、そこでは、自然が両の手一杯に注ぎかける宝物の恵みを受けている」（201頁）さまであり、「生活に絶対に不可欠なものに関しては、所有ということはなく、すべてが万人のためにあるのではないかと思われる」（218頁）。豊饒な自然に抱かれて、社会的不平等の発生していない自然状態に生きる幸福な未開人のイメージである。

ブーガンヴィルはアオトゥールーという名のタヒチ島民をフランスに連れ帰ったので、彼からタヒチの実状を多かれ少なかれ聞き知ることができた。それゆえ、彼の旅行記には、美化する傾向のある記述を修正しようとする箇所も見られる。「我々は、彼らが、彼らの間でほとんど平等であ

り、あるいは少なくとも全員の幸福のために作られた掟にしか従わない自由を享受しているものと信じた。私は間違っていた。タヒチでは、身分の区別はたいへん顕著で、不平等はたいへん厳しいものである。」(230頁)だがこうした反省的な修正箇所はごく僅かであり、上に引用したような、テキスト中に散見する神話化し美化する言説に対してはあまり効力を発揮できない。幸福な自然状態という願望像はブーガンヴィルを強く捉えており、タヒチは「エデンの園」(201頁)や「エリュシオンの野」(213頁)に譬えられ、理想化される。このようにして伝えられたタヒチ像は、ヨーロッパの現状に不満を抱く啓蒙期の人々によって熱狂的に迎えられ、「善良な未開人」の住む地上の楽園の実証として一人歩きをはじめるのである。

特に啓蒙ヨーロッパを熱狂させたのは、タヒチにおける自然な官能の発露、特に女性におけるそれであった。ブーガンヴィル自身も、タヒチの島民、特に娘たちの自然で、何者にも縛られない性行動に魅せられていた。ブーガンヴィルはこれを道徳的に非難するのではなく、むしろウェヌスに譬え、神々しい自然の発露として描き、官能性を彼らの主要な特質として記述する。「呼吸する空気、歌、ほとんどつねに官能的な身ぶりを伴うダンス、すべてが、絶えず愛の喜びを呼び覚まし、すべてがそれに身を投じるよう強く命じる」(221頁)。タヒチの人々がブーガンヴィル一行を、食事ばかりでなく若い娘をも提供してもてなしたことは、「ウェヌスがここでは歓待の女神なのである」(201頁)と、神話的時間空間における自由な官能の発露と肯定的に解釈されている。タヒチの人々はブーガンヴィルにとって官能的で性的に自由であり、自由と無垢との象徴となるのである。

このように理想化されたタヒチは、逆に、自らの属するヨーロッパを眺める際の鏡となる。地区の首長の家で「一人の立派な老人」に出会った際

に、ブーガンヴィルはこの老人がヨーロッパ人に対して示した無関心な態度から次のように推測する。「彼の、心ここにあらずと言うような、心配げな様子は、彼にとって安息の内に過ぎたあの幸福な日々が、新しい人種の到来によって乱されるのではないかと、彼が恐れていることを告げているように見えた。」(195-6頁) だがこれはブーガンヴィル自身の反省の投影であり、ヨーロッパとの接触によってもたらされる悪影響を案じているのは、老人ではなく彼自身なのだ。このエピソードには、所有欲や不平等が支配的なヨーロッパと、こうした悪弊を「未開人」の土地にもたらすヨーロッパの介入に対する批判のきざしが見られる。この批判はブーガンヴィルにあっては、明確な形で述べられることはない。ヨーロッパと接触するまでは幸福な自然状態にまどろんでいたタヒチという像を通して示されるのである⁴⁾。タヒチは無垢の自然状態にある楽園へと理想化され、理想化されたタヒチは墮落したヨーロッパ社会に対置され、ヨーロッパ批判の契機となる。

2.2. フォルスター

ブーガンヴィルに続いてクックもその航海においてタヒチを含む南洋諸島に立ち寄った。彼の1772～75年にかけての第2回航海には、ブーガンヴィルの周航記の英訳者でもあるヨハン・ラインホルト・フォルスターが息子ゲオルクとともに同行した。ゲオルク・フォルスターはこの航海についての旅行記を、航海の2年後にまず英語で、そして1778～80年にかけて自らのドイツ語訳で発表した。『世界周航記』である⁵⁾。

4) 航海日誌においては、文明化による墮落への批判はもっとはっきりと表れている。「さて、島民に望みうるただ一つのことは、ヨーロッパ人の欲望を呼び覚ます事物を、自然が彼らに与えないように、ということである。自然がここでは有り余るほど生み出す果実以上のものを、彼らは必要としない。我々を惹きつける他のものはどれも、彼らに鉄の時代の災いをもたらすであろう。」引用はKohl, S.219に拠る。

5) Forster, Georg: Reise um die Welt. In: Werke in vier Bänden. Hg. v. Gerhard Steiner, 1. Band. Frankfurt/M(Insel Verlag) 1967 以下、引用箇所については本文中に頁数のみを示す。

フォルスターも、タヒチの風景や人々の評価においてヨーロッパの規範に従っている。例えばタヒチのある男の美しさは、「彼はその同郷人の誰よりも白く」「美しく整った顔立ち」をしており、「額は高く、眉は弓なりになっており、大きな黒い瞳は表情に富み、鼻は整った形をしていた」(S.243)と、ギリシア彫刻風のものとして賞賛される。また彼はプーガンヴィルに倣い、タヒチを「パラダイス」(S.254)と呼び、親切な老夫婦のもてなしをギリシア神話の情景になぞらえる(S.278)。気候条件に恵まれ「人為の加わっていない美しさ」を見せる自然の中で人々は「幸福な時」(S.255)を過ごす。この基本的な見方は第2回目のタヒチ上陸の際にも変わらない。タヒチは「カリブソの魔法にかけられた島」(S.548)に譬えられ、そこでの生は「地上で最も素晴らしい気候の中での穏やかな、憂慮のない生」(S.596)として讃えられる。

だが美しい自然の中で幸福に暮らす未開人のイメージはまやかしであることが、フォルスター自身にも明らかになる。タヒチ上陸後間もなく、彼が美しい家屋の中で目にした情景は、その主人である非常に太った男が三人の召使いにかしずかれ、食べ物次から次へと食欲に口に詰め込んでいる様であった。フォルスターはこれにより少なからず幻滅する。幻滅の原因は満たされぬ願望である。「国民全体がある程度の文明に達しながらも、自分たちの間で一定の慎ましい平等を保持することを心得た地上の小さな片隅をようやく発見した」(S.276)と、彼は誤って思ったのだが、これは自らの願望をタヒチに投影したためであった。タヒチがある程度文明社会を形成していることを認識しつつも、自由と平等が保たれている幸福な土地というイメージに彼は固執していたのだ。これ以後彼の記述は、階級差も不平等もある社会という現実と、穏やかな自然の中で自由に過ごす幸せな未開人というイメージとの間で揺れ動く。

「善良な未開人」のイメージは強固なもので、フォルスターのテキストにも、タヒチを理想化する記述が至る所に入り込んでいる。そして理想化されたタヒチは、政治的、経済的、社会的不平等が支配的なヨーロッパ文明社会に対する批判のためのメディアとなる。地上には完全に幸福な状態はもはやなく幸福は相対的なものであるという前置きを述べておいて、彼はタヒチの豊かな自然との中で暮らす人々を褒め称える。「あらゆる食物がたやすく手に入り、この民族の欲求は限られたものである [...] ここでは善良な人々が、まったく妨げられることなく自然の欲求に従っている」(S.329)。フォルスターは、豊かな自然の中で自己充足的に暮らしているタヒチの人々の生活を見て、これを、文明化に伴い人々の欲求が膨れ上がり、一方では富と権力の集中、他方では貧困に苦しむ人々の増加が見られるヨーロッパに対置する。そして楽園タヒチはヨーロッパを批判する契機となり尺度とされるのである。

だが彼は、上述のように、タヒチも歴史的時間から隔絶したまったくの原初状態にまどろんでいるのではないことを見抜いていた。彼がその観察から引き出した結論というのは、タヒチは、ヨーロッパがその最終段階に達している文明化のプロセスの初期段階にあるというものである。プーガンヴィルにおいては、タヒチは「なお黄金時代の純朴さが支配している地方」⁶⁾であり、自分たちからは失われた原初であったが、フォルスターは幸福な原初の自然状態はこの地上にはないと考えており、タヒチも、時間的な差はあるにせよ、ヨーロッパと同様文明化の道を辿ると見ている。このコンテキストで言われる「文明」とは、具体的には物欲、売春、富の集中といった否定的なものである。それゆえフォルスターは、文明化したヨーロッパとの接触により、悪しき文明化の過程が早められるのではないかという危惧を抱く。タヒチの島民に見られる売春や盗みに関しても、そ

6) プーガンヴィル、193頁。

の重要な契機として、ヨーロッパの人々がもたらしたさまざまな商品に対する欲望を、フォルスターは挙げている。ヨーロッパ人は、これまでは自然に手に入るもので満足して暮らしていた南洋の住民に、安いがらくたを商品として与えることにより、彼らのうちに新たな物欲を呼び覚ましてしまい、その簡素で無知な充足状態から引きずり出してしまったのである。

フォルスターは言う。「この無垢な人々に文明化した諸民族の退廃した道徳がうつらないうちに、南洋諸島の住民とのヨーロッパ人の交流が間もなく中断されればよいと、本当に真剣に願う。この人々は、無知と簡素のうちに、かくも幸福に暮らしているのだ」(S.281)。〈ヨーロッパ〉対〈タヒチ〉というお定まりの構図であるが、タヒチの自然状態は絶対的なものでなく、すでに文明化の過程に巻き込まれているものとして捉えられている。フォルスターはタヒチを永遠の自然状態にまどろむ伝説的な国として描くのではなく、ヨーロッパの諸国と同様に歴史のプロセスの中で変化、発展していく社会として記述している。歴史的存在としてタヒチを認識したこと、それゆえヨーロッパとの接触がもたらす影響を予期したという点で、フォルスターの旅行記は18世紀のタヒチをめぐる言説の中でも際立っている。

フォルスター自身は、上述のように、この地上にはもはや絶対的な幸福はなく、幸福は相対的なものであると考えているために、彼にとってはヨーロッパの人間が文明を廃した自然状態に戻ることは不可能かつ無意味なものである。クッカー一行の水夫の一人がタヒチに残ろうとして逃亡し捕らえられた事件に関連し、文明の刺激に慣れたヨーロッパの人間にとり、タヒチの生活は単調すぎ耐え難いものとなるであろうと、彼は推測する。続いて幸福感の相対性について彼は言う。「だが、幸福について抱くイメージは、民族が異なれば、その各々の原則、文化、風俗が異なるのと同

様に、ごく多様である。そして自然は、地上の様々な地域で、その恵みがある所では気前よく、ある所ではつつまじやかに分け与えた。だから幸福感の違いは、全体を構想するにおいて、[...] 個々の被造物すべての幸福をも考慮に入れた、創世主の崇高なる知恵と父親の愛情とを示す説得力ある証拠なのである」(S.599f.)。ここにおいて、異質なるものを射程に入れた相対的世界観は、キリスト教的世界観にからめとられてしまう。キリスト教的ヨーロッパを脅かすかもしれぬ他者は、創世主の多様性に富んだプランの中に組み込まれてしまうのである。タヒチという他者は、ここでは、ヨーロッパが自らの歴史観、世界観を構成し、再確認するための道具になりさがってしまっている。

自然状態における絶対的幸福についてフォルスターが懐疑的であったことの理由は、彼が歴史的発展の不可逆性を見通していたことにのみ求められるものではない。文明が彼においてはその肯定的側面においても捉えられていたのである。フォルスターにとって、文明は一方では、過度の欲求、不平等、争いを生み出す否定的なものである。だが他方、未開状態のベシュレ人を目の当たりにし、その惨めさ、貧しさを観察し、彼は文明化したヨーロッパの優位と幸福を確認せざるをえない。「彼らは我々の優位と利点とをまったく感じていないようであった。[...] 寒さや裸体のきわめて不快な感覚を肉体に感じているにもかかわらず、知性と思考力が欠けているために、それを防ぐ手段を考え出すことができない者、諸観念を互いに結びつけ、自分自身の惨めな境遇を他の者のさらに幸福な状態と比較することのできない者ほど獣に近い人間、それゆえこれほど不幸な人間はいないであろう」(S.923)。次いでプーガンヴィル同様、ルソーを暗に批判しつつ、ベシュレ人の惨めな境遇と比較するなら、ヨーロッパの文明化した状態は「雄弁な哲学者」の思弁とは異なり「計り知れぬほどずっと幸

福」なものであると評価する。ここで言われる文明には道德の退廃や不平等といった否定的要素は見られない。自然を征服し世界を支配する主体の勝利として肯定されている。それに対し、自然は裸体や天候の厳しさという否定的な様相において描かれる。〈文明〉対〈自然〉という図式は不変であるが、意味づけはまったく逆転してしまっている。文明化し自然を支配することによりヨーロッパはある程度幸福な状態に達しているのだという、文明化へのオプティミズム、ヨーロッパの「優位と利点」への確信が認められる。ペシュレ人という生きた証拠によりこのオプティミズムは強化され、フォルスターは自然回帰を唱える「きわめて邪な詭弁」(S.923)を実体なきものとして批判する。

フォルスターは様々な地域の民族を観察した自らの経験から、相対的、多面的な世界の捉え方を要請していた。だがここで露呈しているように、文明化したヨーロッパが他の諸地域およびその住民に対して優位にあるという世界観から、彼は自由でなかったのである。そして啓蒙期にふさわしく、彼は文明の利をタヒチに分け与えようとする。航海記の序文で彼は「タヒチの無害な人々に」羊や牛などの家畜を与える試みに言及し、これにより彼らが「より幸福に」なるだろうと言う(S.21)。だが優位に立つヨーロッパがタヒチに分け与える恵みは進歩した技術ばかりではない。「この贈り物は、いつか、道德上の改善のための土台となるかもしれない」(a.a.O.)。タヒチの人間には道德上の欠陥があるのだから、ヨーロッパという模範を示し啓蒙すべきだというわけである。この道德とは、ヨーロッパにおけるキリスト教倫理に基づいた風俗、慣習に他ならない。ヨーロッパの人間がタヒチの島民に対して負っている使命のうちでもっとも重要なものとしてフォルスターが挙げるのは、「その道德上の性格を改善し、徳についての我々の崇高なる概念と啓示された宗教における神の原

則を教える」(S.20) ことである。フォルスターにとっては、キリスト教の、そしてそれに基づいたヨーロッパの社会と道徳は、原則的には絶対的に良きものなのである⁷⁾。

フォルスターは啓蒙の立場から、文明化とともに墮落したヨーロッパを批判し、南洋との出会いを契機として、これを鏡として己の社会、経済、政治の状況に対して批判を行っている。だがその根底にある意識が、ここで露呈している。「このように多くの我々の隣人よりも、天は我々を優先してくれたという意識が、常に人倫の改善のため、我々の道徳的義務の厳格な行使のために用いられるのであったなら」(S.923f.) という記述から明らかなように、フォルスターが批判するのは、退廃している文明ヨーロッパの現状である。ヨーロッパが優位にありながらも道徳的に退廃し、他の「未開の」民族を正しく導くことができないという点のみが批判されるのである。ヨーロッパの優位自体は揺らぐことがない。このようなヨーロッパ優位の意識とそれに基づいた世界啓蒙の必要性の確信を抱いていたからこそ、フォルスターは、旅行記中の数箇所でもヨーロッパと南洋との接触を憂いたり、植民地主義の露骨な表明を批判したりする一方で、旅行記の序文において次のように述べることもできたのである。「まさに、かくも有益でまことに役に立つ意図で行われるこのような発見の旅が、さらにもっと続けられますように」(S.21)。彼にとって、病害や悪しき欲求を引き起こすという点ではヨーロッパ人の南洋来訪は忌むべきことである。だがヨーロッパが理性に従って正しく振る舞いさえすれば、南洋の人々を

7) フォルスターの要請する啓蒙は、ジャン＝バティスト＝ジョゼフ・フーリエがナポレオンの命を受けて開始した『エジプト誌』に、エジプト遠征について記した以下の言葉ときわめて似通った調子のものである。「ナポレオンの意図は、ヨーロッパという有用な範例をオリエントに提供し、その住民の生活条件を改善するとともに、完成された文明のもたらすあらゆる恩恵をその住民に与えることであった。」エドワード・W・サイード（今沢紀子訳）：オリエンタリズム（平凡社ライブラリー）1995年（第4刷）201頁。これら啓蒙の言説には「非ヨーロッパのあらゆる民族・文化を凌駕するものとしてみずからを認識するヨーロッパのヨーロッパ観」（同書、30頁）が認められる。

無知蒙昧から呼び覚まし、彼らを宗教においても道徳においても教育できるということは、彼は露ほども疑っていない⁸⁾。

フォルスターの旅行記は、ヨーロッパによる南洋「発見」の意義だけでなく、ヨーロッパと接触することにより南洋に引き起こされつつある変化についても全世界を射程に入れて考察し、経験的な旅行記を越えた哲学的論考ともなっている。プーガンヴィルの『周航記』については、後にディドロにより『プーガンヴィル航海記補遺』が書かれたのに対し、フォルスターの場合は「『クック航海記補遺』がすでに世界周航記に取り入れられている」⁹⁾のである。ヴエテノウによれば、手放しで自然状態を賛美、美化することなく南洋の島民を観察、記録したこと、また、自己充足した幸福のうちに暮らしていた南洋の民が、ヨーロッパ人の来訪によりその幸福を脅かされている状況をも正確に見て取り、ヨーロッパの文明について反省を加えていること、こうした点にフォルスターの旅行記の特性がある。彼以前の旅行記作家とは異なり、フォルスターは、南洋の島民の生活や社会を正確に観察すると同時に、自らも属するヨーロッパのあり方をも旅行記中で批判的に考察しているのである。従って「彼もディドロ同様、経済

8) 世界周航の後すぐにまとめられた『世界周航記』に対し、後になってヨーロッパによる世界周航、新たな地理上、人類学上の発見の意義を考察して書かれた『発見者クック』においては、フォルスターは、南洋の体験から時間的にも空間的にも隔たったところにいる。『世界周航記』では、後になって行われた反省が書き加えられているにせよ、航海中に書き留められた直接の体験が元になっており、異質な人間、事物を目の当たりにし、フォルスター自身の立場、世界観が揺れ動いている様子が伺われる。だが、『発見者クック』においては、フォルスター自身の属するヨーロッパの優位はもはやまったく疑いの余地のないものである。アジアの独裁制に言及した後で、フォルスターは「普遍的な啓蒙」という言葉さえ用いて、ヨーロッパによる全世界の啓蒙という夢を語りさえる。彼は、クックが世界周航を行い地球上のさまざまな大陸や島々に関する情報をもたらしたことを、地球上のさまざまな地域でヨーロッパ精神を駆使し、文明化を進め社会的幸福に達するという「人類の新たな有効な発展」を促す契機として評価する。そして「昔からのアジアの強情と、最も完成され豊かで尽きることのない自然の宝に最も恵まれた大陸が、啓蒙のあらゆる進歩に対して示すあの抑えがたい反抗とを、より賢いヨーロッパ人がついに攻撃する」ことを要請する。Forster, Georg: Cook, der Entdecker. In: Werke in vier Bänden. Hg. v. Gerhard Steiner, 2. Band. Kleine Schriften zur Naturgeschichte, Länder- und Völkerkunde. Frankfurt/M(Insel Verlag) 1969, 213f.

9) Wuthenow, Ralph-Rainer: Die erfahrene Welt. Europäische Reiseliteratur im Zeitalter der Aufklärung. Frankfurt/M(Insel Verlag) 1980, S.245.

的目標や、また人間的・啓蒙的目標のためであっても、他の民族から自然状態を奪う権利をヨーロッパ人に対して与えようとはしない¹⁰⁾。しかし今日批判的に捉えなくてはならないのは、植民地化や強制的な文明化を容認、要請する態度に表れるあからさまなヨーロッパのヘゲモニーだけではない。むしろ、フォルスターの旅行記にも露呈している意識されざる啓蒙のヨーロッパ中心主義、他者に対していとも簡単に掲げられる「人間的・啓蒙的目標」に内在するヨーロッパの自己優位意識の方が、より根本的な問題なのではないだろうか。フォルスターは一方では啓蒙理性が作り上げてきた幸福な自然状態という神話に固執しつつ、ヨーロッパ文明の成果と、道徳、宗教におけるヨーロッパの優位、タヒチ啓蒙の必要性も確信している。この言説からは、いつのまにか、フォルスターが出会ったタヒチ、彼の言説に揺れをもたらししたタヒチは姿を消してしまっている。

3. 旅行記への哲学的補遺

【ブーガンヴィル航海記補遺】を記して、啓蒙ヨーロッパのタヒチ来訪により引き起こされる問題を憶測的に記述しつつ、文明化したヨーロッパを批判したアイドロも、ヨーロッパ中心主義を免れてはいない。【航海記補遺】¹¹⁾は1772～76年にかけて書かれたが、発表されたのは1796年になってからである。この小品でアイドロは、ブーガンヴィルの旅行記を読んだAとBの対話に、旅行記の虚構上の【補遺】としてタヒチの老人の演説、そして従軍牧師とタヒチ島民オルーとの対話を挿入している。中心となっているのは、「善良で正直な未開人」(41頁)の住むタヒチに所有欲と欺瞞的な道徳を持ち込んだヨーロッパへの批判、そして南洋来訪の契機となっ

10) Wuthenow, S.256.

11) ドゥニ・アイドロ (浜田泰佑訳) : ブーガンヴィル航海記補遺 (岩波文庫) 1992年 第5刷。以後本書からの引用は、本文中に頁数のみ記すこととする。

た植民地主義に対する批判である。ブーガンヴィルの航海記においては、タヒチはパラダイスとして美化され描かれるにとどまっていた。パラダイスであるタヒチをデイドロはヨーロッパ批判の契機にする。

【航海記補遺】中の「老人の告別」は、ブーガンヴィルの旅行記では簡単に触れられただけの、憂いの表情を見せる老人の逸話を元にして書かれた。老人がブーガンヴィル一行の出帆に際して告別の辞を述べるという虚構の物語である。老人は、ルソーの『不平等起源論』を思わせる言い回しで、ヨーロッパ文明を持ち込んだブーガンヴィルを非難する。「この土地では何によらず万人の共有であるのに、お前は〈俺のもの〉〈お前のももの〉という譯のわからない區別をわしらに説いた」(33頁)。そして官能の衝動に身をまかせることはごく自然なことであったのに「罪という観念、病気の危険、こいつがお前といっしょにわしらの間に入り込んで来た。わしらの楽しみは、昔は全くうれしいものじゃったのに、今となっては悔いと恐怖がつきまどっておるのじゃ」(37頁)。いまだ「世界の起源に」近いタヒチの社会に「世界の老衰期」(30頁)に接近したヨーロッパが、不必要な欲求や不自然な道徳を持ち込み、タヒチの幸福な未開状態を破壊したというのである。また「従軍牧師とオルーの会話」では、自然に従うタヒチの人々と比較して、ヨーロッパの道徳、特に性道徳が、自己欺瞞に満ちた空虚で不自然なものであることがあばかれていく。デイドロはタヒチの老人とオルーを装い、彼らの視点に立つという設定で、文明化したヨーロッパを眺める。そして自然状態に近いタヒチと対置することにより、ヨーロッパに蔓延している悪徳、所有欲、欺瞞、不平等などを際立たせる。デイドロが主にその批判の矛先を向けたのは、フォルスターの場合と同様に、自然状態に近い南洋世界へのヨーロッパの介入である。ただしフォルスターにあっては世界を旅する啓蒙ヨーロッパが南洋で観察したものごと

の記述と伝達が第一義的なものであったのに対し、デイドロは南洋を鏡としてヨーロッパ批判を行うことを主眼としている。南洋はヨーロッパ批判のための道具とされ、そのために「無垢な自然状態」や「自然のままの官能の発露」という表象に限定されてしまうのである。この批判においては批判する主体である啓蒙ヨーロッパは疑問に付されない。社会的、政治的、経済的に危機的状况に陥っているヨーロッパを、南洋を尺度として批判する啓蒙ヨーロッパ—ここにデイドロもフォルスターも属しているわけだが—、これは自分自身を疑うことを知らない。「南洋の理想化に端を発する文明批判は、いまだ、自分自身を自らの行う批判の対象にはしていない」¹²⁾のである。この批判の過程においてタヒチは物言う主体ではなく、ヨーロッパと対置されるべき自然状態の象徴にされ、啓蒙ヨーロッパが作り出した表象に囲い込まれてしまう。タヒチを「無邪気で仕合せ」(33頁)な自然状態として表象しているのはヨーロッパであり、このタヒチは実はヨーロッパの作り物に過ぎないということには、デイドロ自身も気づいている。そこで彼は作中の対話者AとBに、老人の告別について次のように語らせる。「A—[...]粗暴で野蛮なものだが、そいつを一貫して、ヨーロッパ的な観念や表現が見いだせるように思うがね。B—こいつはタヒチ語をスペイン語に譯し、それをさらにフランス語に重譯したものだ [...]」(40頁)。だがデイドロはこうした取って付けたような理由を述べるにとどまり、この問題の本質まで踏み込んでいない。デイドロの『航海記補遺』では、プーガンヴィルによって伝えられたタヒチ像は自由や平等といった概念へと捨象されている。この抽象化によりデイドロの『補遺』は、理想化されたタヒチ像をさらに強固なものとするのに貢献した。

12) Japp, Uwe: Aufgeklärtes Europa und natürliche Südsee. Georg Forsters >Reise um die Welt<. In: Piechotta, Hans Joachim(Hg.), Reise und Utopie. Zur Literatur der Spätaufklärung. Frankfurt/M(Suhrkamp) 1976, S.10-56, hier S.37.

4. 虚構の楽園物語

フォルスターはその旅行記で、階級差や不平等もある文明化した社会として、多少なりとも現実に近い形でタヒチを描き出した。だがデイドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』のように、実際の旅行記をもとにして書かれた虚構の作品において、自然状態にある幸福なタヒチという「善良な未開人」神話は、より一層強固に存続していく。ブーガンヴィルの『周航記』の広範な読者は、この旅行記のうち、「自然状態にある人間の生を理想化したものとして読むことができる箇所、その限りで、自分たちの理解したルソーの理論が正しいことを後から証明するように思われる箇所を、特に引き合いに出した [...]」¹³⁾。特にドイツ語圏における旅行記の受容は、ツァハーリエが1777年に出した『タイティあるいは幸福の島』(Tayti oder die glückliche Insel) が良い例であるが、熱狂的な理想化という形をとった¹⁴⁾。「まったく逆の内容の報告や体験が牧歌的なイメージを破壊したり、またはパラダイス幻想を壊したとしても、パラダイスのイメージは分離し、それから虚構の旅行記などの文学的作品において、欠けることなく活発な独自の生を営むのである」¹⁵⁾と言われるように、旅行記の批判的なモメントはあっさり切り捨てられ、南洋の楽園という言説が神話化され一人歩きを始めるのである。

啓蒙の作家に数えられるクニッゲが、1783～85年にかけて発表した『ペーター・クラウス物語』¹⁶⁾の中でも、南洋は楽園として描かれている。主人公ペーター・クラウスは、偶然知り合ったブリックという男の死

13) Kohl, S.223.

14) ドイツ文学における南洋旅行記の受容については、Bersier, S.137-162.

15) Weigel, Sigrid: Zum Verhältnis von <Wilden> und <Frauen> im Diskurs der Aufklärung. In: Weigel, Topographien der Geschlechter. Kulturgeschichtliche Studien zur Literatur. Hamburg(Rowohlt) 1990, S.115-142, hier S.131.

16) Knigge, Adolf Freiherr von: Geschichte Peter Clausens. Ausgewählte Werke in zehn Bänden. Bd.1. Hannover(Fackelträger-Verlag) 1991 以下、引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

に際して彼の旅行記の手稿を手に入れる。ブリックが1772年のクックの第二回航海に参加したという設定からは、この虚構の旅行記がフォルスターの『世界周航記』を元にしていることが推測される。船上で健康を損ねたブリックはタヒチに来て回復する。タヒチとその島民は「美しい」「幸福な」「善良な」(S.164)と形容される。そして「体が官能的な印象に対して敏感になった」(a.a.O.)ブリックはタヒチの若い娘に恋をする。彼女は「しとやかさ、無垢、素朴さ」「美しさと純真さ」とを兼ね備えており、「コケットリーと真の純粋な内的感情のなさ」(S.164f.)とを特徴とするヨーロッパの女性とまったく違う。ブリックは「再びヨーロッパの無理な循環に押し込められ、心配事、激情、先入見、役にも立たぬ欲求によってぐるぐると引き回される」(S.165)ことを嫌い、恋人の元に、すなわちタヒチに残る決心をする。だがヨーロッパの不条理で不平等な社会と比較して楽園のように思われるタヒチでの生活にも、ブリックはやがて飽きてしまう。この話は、ある水夫が脱走しタヒチに残ろうとしたという事件についてのフォルスターの記述を下敷きにしている。クニグはフォルスターの考察を虚構の物語に仕立て、状況をさらに先まで進ませる。島の生活に飽きたブリックは、ヨーロッパの風俗習慣を島に広めようとするのである。彼はヨーロッパにいるときと同様に、自然が必要とする以上の欲求を抱くだけでなく、技芸や学問を持ち込み、若者をヨーロッパ風に教育しようとする。そして彼は「自分自身が立派でないという気持ち、落ち着きのない活動、たえずの変化を求めるといった習慣的欲求」(S.168)に苦しむ。とうとう彼は「自分の惨めな文化によって静かな民族から幸福と平和とを奪ってしまう」(a.a.O.)と考え、小舟に乗ってタヒチを後にする。彼は波に運ばれ、やがて氷山に突き当たり、潮流にのってこれを通り抜け伝説の南の大陸に到達する。この大陸については、たわわに実る果物、甘い泉、

人なつこい獣など自然の豊かさが語られる。間もなく姿を現した人間は「美の最高の理想」(S.177)であり、「穏やかで素朴な自然人」(a.a.O.)である。彼らの肌は、当然ながら、白い。この大陸の風景描写も、また善良な人々の簡素で健康な生活の記述も、プーガンヴィルのタヒチ描写を思わせる。この土地の伝説に拠れば、ここの人々は、墮落した人類を嫌ってここに妻とともに逃げ、大洪水を逃れたアダムの息子の一人の直系の子孫なのである。

ブリックの旅行記では、ヨーロッパがタヒチに見出していた楽園の属性が二つの場に分けられている。タヒチと伝説の南の大陸の楽園という、ヨーロッパが自らの願望を反映させてきた楽園である。一方では、悪習に染まった文明ヨーロッパと比較すれば楽園かと思われる、無垢で幸福な人々の住むタヒチ。だがクニッゲにおいてタヒチはあくまで未開の地である。「新奇なものの最初の刺激」(S.167)だけを持った所、官能に従う善良な人々の住むタヒチ。ここは世俗的な幸福の場として描かれている。他方では、始源の神話を投影できる伝説の南の大陸であり、ここに住む人々はキリスト教的世界の内部にいるがまだ罪を負っていない、原初の罪無きヨーロッパ人なのである。

ブリックは、タヒチの簡素な社会と比較して、不自然な欲求を生産し、「妬み、術策、所有欲」(S.167)に満ち、不条理と不平等が支配するヨーロッパ社会を批判する。だが自分自身も、常に変化と刺激を求め、人工的に作り出される欲求を追い求めるといふヨーロッパの風俗習慣を捨て去ることができないことに気づくと、ブリックは自己を非難する。この自己批判は結局のところヨーロッパに対して向けられているものであり、ここでは墮落したヨーロッパの「人為的人間」(a.a.O.)対く無垢なタヒチ人という、デイドロも用いた構図へと捨象されている。そしてこの構図の中で

タヒチの島民、特に女性は見られ消費されるだけの、受動的な存在である。クニッゲのテキストではブーガンヴィル以来クリシェとなった自然で官能的なタヒチの島民という像が再生産されているのだが、しかも官能のよろこびを享受するのはヨーロッパ人ブリックのみである。ブリックはヨーロッパ文明の毒に侵されている自分自身を非難はするが、〈主体—ブリック〉と〈客体—タヒチ〉という関係性は一度として揺らがない。タヒチはヨーロッパ人に官能の喜びを提供するが、真の対話者として登場することはないのである。

一方当時のヨーロッパの思想に大きな影響を与えていた始源神話は、フォルスターの航海記以来タヒチに投影することはもはやできなかった。ブーガンヴィルはまだタヒチ島民を墮落していないヨーロッパ人と解釈しようとしたが、フォルスターはタヒチもまた文明化し不平等のある社会であることを看取ったのである。そこでクニッゲは始源を伝説の南の大陸に見出す。南の大陸の楽園は、空間的に外部から隔絶し、また時間的にも原初のパラダイスのままの、時間無き世界として設定されており、ルソーの説いた歴史の循環の外にある。この国は啓蒙ヨーロッパにとってのユートピアであり、キリスト教的世界の始源であり家父長制社会を形作っている。

クニッゲはタヒチと南の大陸の土地という二つの楽園を設定し、それぞれに異なった特性を付与することにより、タヒチを「官能」「無垢」「充足」といった言葉に囲い込んでいる。そしてキリスト教世界観に合致した原罪以前のパラダイスとして表象された南の大陸の楽園に対し、タヒチは、ヨーロッパの欲望、世俗的幸福が投影される場となる。タヒチは無垢で幸福ではあるが受動的な存在として、ヨーロッパによって徹底的に消費される。ヨーロッパの願望である罪なき始源のパラダイスは、もはや消費

され尽くしたタヒチには投影されず、伝説の大陸にあるものとされる。

ブリックの手稿は途中で途切れ、ブリックが冒頭で約束した南の大陸の位置、そこに到る道は示されずに終わってしまう。これを読んでいたベーター・クラウスは思わず次のように声をあげて言う。「僕はなんて不幸なんだ。だって中心部分が、この国々がどこにあるかという知らせが欠けているじゃないか [...]。僕は、ライアーベルクと僕がこの手稿に従えば手にすることができたかもしれない財宝をそれほど当てにしていたわけではない。でも僕は、貴き読者の方々よ、あなたがたにこの断片を、僕が手に入れた通りにお知らせすることが、自分の義務だと考えたのだ。さあ、これで好きなことをおやりなさい」(S.250)。ここには、まさにベーター・クラウス自身が否定している植民地主義的意図が見え隠れしている。タヒチはもう征服し消費してしまったのだ。植民地化の次なる対象は南の大陸なのである。ヴァイゲルは、啓蒙の言説における女性と未開人について論じた文章の中で、この飽くことなきパラダイスの探求と植民地主義の関連を次のようにまとめている。「黄金時代と地上の楽園の探求は、最初に行われた数回の発見航海によってその正しさが証明されると同時に、また幻滅も味わった。[...] 発見された土地とその住民の持つ、地上の楽園像に合致する特徴—豊かな天然資源、未開人の温和さと無垢—こそは、植民地化にとってその土地と住民とを魅力的に見せる特徴でもあった。征服自体は地上の楽園を破壊し、その一方で願望はいまだ発見されざる地域へと次々に向けられていった」¹⁷⁾。

5. 啓蒙ヨーロッパによる表象

南洋の島々は18世紀後半のヨーロッパ人にとって、もはや未知の想像上

17) Weigel, S.131.

の土地ではなくなっていた。伝説上の珍奇な動植物や人間の住む所というイメージは、数回の航海とその後出版された旅行記によって修正された。だが南洋はヨーロッパにとって、自らの願望を投影する受動的な他者であり続けた。ブーガンヴィルの『周航記』からクニッゲの虚構のテキストにいたる言説を貫いているのは、文明化によって墮落していない楽園とそこに住む「善良な未開人」というイメージである。ヨーロッパは、文明化の過程で生じてきた諸々の矛盾からの出口を求め、自らが描き出してきたパラダイスをタヒチに見出した。このパラダイスはまったくヨーロッパ的なもので、風景もタヒチの島民もギリシア神話に譬えられる。ギリシア神話的形象をタヒチに見ていることから明らかなように、この楽園のイメージには始源の神話がつきまといっている。墮落する以前のヨーロッパの始源がタヒチに見出されたのである。そして啓蒙の批判的精神は、自らが発見したタヒチとヨーロッパとを比較し、無垢で自由な人々によって営まれる平等なタヒチの社会を尺度として、墮落したヨーロッパ社会を批判する。だがこの批判においてタヒチは現実から捨象され、無垢や平等といった、ヨーロッパの希求した概念を表すシンボルとしての機能に限定されてしまう。無垢なヨーロッパ、墮罪以前のヨーロッパである〈タヒチ〉というイメージが成立し、これは何より詩的空想力の領域で根を張っていく。

だが他方、啓蒙ヨーロッパは歴史的発展の中にあるタヒチの社会を観察し、ここにも社会的矛盾があることを見て取った。願望とそれに沿わぬ現実との間でフォルスターの旅行記は揺れており、その揺れこそが他者と自己とを見直す契機となる可能性をはらんでいた。だが自らが構築したイメージにそぐわない現実を目の当たりにし、パラダイス発見の願望を抱くヨーロッパは幻滅を味わう。そして幻滅から、道徳と宗教において蒙昧な〈未開人〉にヨーロッパ文明の恩恵を授け、彼らを啓蒙しようという願望

が生じてくる。

このように〈タヒチ〉は、墮落したヨーロッパを批判するための鏡にされるにせよ、啓蒙の対象となるにせよ、啓蒙ヨーロッパが構築した表象としてのみ存在するようになる。〈タヒチ〉はあるがままの自然現象として存在するものではなく、中心たるヨーロッパが非ヨーロッパという外部との間に設けた「存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式」¹⁸⁾なのである。タヒチをめぐる言説においては、タヒチ自らは語るものがなく、言説の中心にあるのはつねに、言説の主体、啓蒙理性である。こうして啓蒙理性は、他者の表象を構築することにより、自己を同定し、自らの輪郭を定め堅固なものにした。他者との出会いは、自己を批判的に眺める契機ともなりうるはずのものであったが、啓蒙理性は他者を媒介として自己を再確認し、世界を認識、啓蒙、変革する主体としての位置を一層強固なものにしていったのである。

18) サイド、20頁。

Tahiti als Paradies

Repräsentation durch Europa

Yumiko Washinosu

In der letzten Hälfte des 18. Jahrhunderts, gerade in der Zeit der Aufklärung, „entdeckt“ Europa die Südinseln. Um die neu erhaltenen Erkenntnisse weiterzugeben, wurden viele Reiseberichte geschrieben, die dazu beitrugen, den Mythos der Südinseln entstehen zu lassen. Der Mythos wurde durch viele fiktionale Texte wiederholt und konsolidiert. Dabei hat der Diskurs des „Guten Wilden“ mitgewirkt, der seit Rousseau das aufgeklärte Europa fasziniert hatte.

Die Schönheit der Landschaft und der Leute in Tahiti begeistert die Reisenden und wird durch den Vergleich mit Motiven der griechischen Mythologie idealisiert. Einfalt und Naivität der Tahitianer sowie Gleichheit ihrer Gesellschaft fasziniert viele Europäer. Tahiti befindet sich in ihren Augen immer noch im glücklichen Naturzustand, der im damaligen europäischen Diskurs mit dem anfänglichen Paradies der Menschheit gleichbedeutend war. So wird Tahiti zum Mittel zur Kritik am durch die Zivilisation verdorbenen Europa und der Reisebericht zur Geschichtsreflexion. Indem der Mythos von seligem Naturzustand in fiktiven Texten wiederholt wird, ist Tahiti auf Mittel zur Kritik an Europa reduziert und wird von seiner wirklichen Vielseitigkeit abstrahiert. Die realen gesellschaftlichen

Zustände in Tahiti, die in das idyllische Wunschbild nicht passen, versucht man durch die allgemeine Aufklärung zu verbessern, die das aufgeklärte Europa nun als Subjekt der menschlichen Entwicklung fördert und auf alle Völker übertragen will.

In keinem realen oder fiktionalen Reisebericht begegnet einem Tahiti selbst. „Tahiti“ ist eine Repräsentation durch das aufgeklärte Europa. Europa mythisiert Tahiti nach eigenen Vorstellungen, um es danach auf ein Medium zur Kritik an eigenen Mißständen zu reduzieren. In der Begegnung mit dem anderen, die die Möglichkeit der Selbstrelativierung in sich birgt, erkennt das aufgeklärte Europa nur sich selbst als das Subjekt der Aufklärung der Welt.

(慶應義塾大学非常勤講師)